

Title	沖縄のユタの宗教観における現代の変容
Author(s)	新里, 喜宣
Citation	文化/批評. 2009, 1, p. 229-244
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/75753
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

沖縄のユタの宗教観における現代の変容

新里 喜宣

1. はじめに

「沖縄の宗教」といえば何を思い浮かべるかと問われれば、恐らく「ユタ」を挙げる人が最も多いのではないだろうか。宗教学や人類学、社会学、民俗学などを専攻している人ならば一度は聞いたことがあるほど、ユタという民間巫者についての認知度は高いと思われる。ユタとは、沖縄に古くから根ざす宗教者であり、特別な霊的能力を保有していると考えられている人々のことを指す。彼らは、人々が生活のなかで何か問題を抱えたとき、「ハンジ」と呼ばれる判断事を行い、先祖の声を聞き神の意思を感じ取ることで、問題の原因、解決策を導き出すのだ。本稿の関心は、現代の沖縄社会において、ユタの宗教観は従来と比べてどこが変化しているか示し、その意味を探ることにある。

ユタは沖縄に古くから存在し、民衆の要望に応じてきた。研究者もそこに着目し、ユタについて理解しようとする研究が相次いで世に出されてきた。例えば、シャーマニズムとは何かという関心のもと、ユタの成巫過程に注目した研究〔佐々木 1978〕や、ユタが主導的に行う葬送儀礼の背景には、如何なる民俗的世界観が潜んでいるのかを探った研究〔桜井 1973〕が挙げられよう。また、沖縄社会とユタの間には、どのような関連性が見出されるのか探った研究者もいた。その代表的論者は、W・P・リーブラである。彼は「沖縄の社会の基礎単位は家族とか、親族とか、部落であり、個人ではない」〔リーブラ 1974: 55〕とし、ユタの宗教観にもその影響は色濃く反映されているとした。沖縄には「門中⁽¹⁾」と呼ばれる父系血縁原理に則って構成される親族集団があり、その結束は非常に固いことが特徴だ。ユタが依頼者に告げることを実践するためには、依頼者や家族の実践、もしくは宗教的関心のみでは十分とせず、親族が協力して行わなければならないことが多い。沖縄社会がそうであったように、ユタの宗教観も多分に集団中心であったのである。その他にも多数の興味深い先行研究があり、沖縄社会とユタの特徴とは如何なるもので、その文化的特質の由来、構造はどのようなものなのか理解する試みが行われてきた。

しかし、視点を変えて現代の沖縄に目を向けると、これまでの研究において熱い視線を浴びてきた伝統的思考様式、社会的価値観が、依然として大切にされているとは言いがた

い面がある。これには1972年の本土復帰が大きく関わっている。例として、第二節で詳述する「トートメー問題」は、日本本土の価値観などが沖縄に浸透し、沖縄社会が以前とは異なるものになりつつあることを象徴的に示した。そして、宗教も、社会の変化に伴うように新たな展開を示し始めた。管見の及ぶ限り、そこに初めて注目したのは池上良正[1991]と島村恭則[1995]である。池上は「沖縄キリスト福音センター⁽²⁾」を事例として、ユタの宗教観や実践などと比較しながら、なぜこの教団が沖縄の人々に受け入れられ、発展することができたのか考察した。島村が研究対象としたのは「龍泉⁽³⁾」という教団である。池上と同様に島村も、ユタを中心とした沖縄の民俗宗教と比べた場合、龍泉は何が変わっていたのか、如何なる要素が人々を惹きつけたのか読み解いてみせた。ユタの提示する宗教観、災因論には体系性というのはいらない。体系性がないため、違うユタのところに行けば問題の対処法も異なり、何が正しいのかわからなくなって、お金も手間もかかることになる。結果として、ハンジを受けた人、もしくはその家族や親族の生活を圧迫する場合もあったようだ。この二つの教団は、沖縄の民俗宗教的な色彩は多少残しながらも、不幸の原因を個人個人の心の問題に帰着させ、その対処法も、一元的に体系立てた教義の確立によって可能とした。沖縄キリスト福音センターと龍泉は、それぞれ教義上の違いはもちろんあるが、面倒な親戚付き合いを強要せず、自らに降りかかる苦難は個人個人の心の持ちようの問題であると説き、人々の生活が変わり行く中でそれに見事に適応した点において共通していたと言えよう。

池上と島村は沖縄の社会変動に伴う新たな宗教集団の展開に目をつけたのに対し、佐藤壮広[1999]と塩月亮子[1999]はユタの宗教観、言説における変容に着目し、本稿の関心とかなり近い視点から研究を行っている。彼らの研究を一言で表すならば、沖縄の民俗宗教とスピリチュアリティ、新霊性運動=文化[島藪2007]との接点、もしくは接近を探ったといえよう。佐藤は、沖縄の民俗宗教の担い手であるユタと、精神世界の影響をふんだんに受けているセラピストとの出会いという興味深い事例から、両者の宗教観の共通点、差異を印象深く描き出してみせた。塩月は、近年ユタの中にはニューエイジ的な世界観を持つ者がいるとし、これまで静態的に捉えられがちであった沖縄の民俗宗教の新たな展開を示す試みを行い、その研究の意義は大きい。

しかし、以上で紹介してきた研究はどれも興味深い見解を提示しているが、問題点がないわけではない。沖縄社会とユタについて、現代的な状況を広く射程に収めて考察した研究に欠けているように思われる。繰り返しになるが、沖縄社会は以前と同じではない。それでも、ユタは民衆に求められる形で存在している。しかし、そこで求められているユタとは、これまで語られてきたようなユタなのであろうか。島藪進[2007]の議論を参考に

して考えると、現代社会で無視できない影響力をもつ新靈性運動＝文化が広く普及した背景には、個人化と呼ばれるような連帯意識、ライフスタイルの変化が挙げられる。ユタを中心とした沖縄の民俗宗教についても、まずは現在の沖縄社会がどのような様相を呈しているかおさえた上で、考えてみたいと思うのだ。本稿では、このような視点に立ち、沖縄社会の変化を概観した上で、現代のユタについて筆者の考えを述べていくことにしよう⁽⁴⁾。

2. トートーメー問題とユタ

1980年1月14日、沖縄中を巻き込む論争の発端となった新聞記事が掲載された。地元新聞社である「琉球新報」が企画した、「うちなー、女・男」という連載が開始されたのである。これは後に「トートーメー問題⁽⁵⁾」と呼ばれることになるが、「トートーメー」とは先祖の位牌のことを指し、トートーメー問題は、沖縄の独特な位牌継承の慣習を巡る様々な問題が明るみに出され、大きな論争を巻き起こした。この問題は、沖縄社会とユタの現代的な様相を捉える上で、重要な示唆を与えてくれる。詳しく見ていこう。

沖縄において位牌は男子、特に長男が継ぐべきとされ、女性が継ぐことは望ましくないとされる。位牌を男系で継ぐことを沖縄の美德と考える人は多く、その規範を守らないと先祖の祟りがあると考えられていた。そして、位牌継承に際して婿養子を取ることも忌避され、男子が生まれなかった家は父方の親戚から養子をもらうか、家を断絶させるしかない。財産の相続は位牌とセットであり、従って女性が財産と位牌を相続することは理想的にはありえない。これでは、女子しかない家は、財産と位牌を実の子に譲ることは叶わず、かなり苦しい思いをすることになる。また、男子を産むことが理想とされるため、女性は男子が生まれるまで、何人も子供を産み続けなければならない場合もあり、精神的、身体的なストレスは相当なものがあつた。そのため、トートーメー問題においては、女性の人権問題が大きく取り上げられることになった。

先述したとおり、沖縄では父系に連なる親族集団のことを門中と呼び、成員同士は非常に親密な付き合いをすることが特徴だ。トートーメー問題においては、その負の側面が際立つ結果となった。親族間のつながりが深ければ深いだけ、家族や個人の問題はより大きな集団の問題となる。女兒しかない親は、男系にこだわらず位牌と財産はその女子に継がせたいと思っても、親戚の目を気にしないではいられなくなる。また、親戚が積極的にその家族の位牌継承に口を挟んできて、半ば強制的に父方の親戚から養子をもらうことになり、その結果、実の子供は位牌と財産の継承から全く除外される場合もあつた。トートーメー問題を見る限りでは、当時の沖縄ではこれは珍しいケースではなかつたようだ。

親戚からの「干渉」と併せて、トートーメー問題の主題の一つはユタ批判であつた。そ

れでは、ユタの如何なる面が批判の対象となったのだろうか。当時の記事をもとに探ってみよう。次の文章は、琉球新報〔1980年2月9日朝刊〕に掲載された投稿文である。

戦争で一家全滅した家の養子になった人の子供が交通事故で死んだ。するとユタが「トートーメーを持つべきでない人が持っているから」といい出し、私の夫のところへ「トートーメーを持ってくれ」と相談があった。いまさら養子になつたりできないので断ると、「物事を知らない」など悪口をいわれて攻撃されています。〔主婦、50歳、沖縄本島中部〕

トートーメー問題において、このような投稿は数多く見られた。この投稿文では詳しくは述べられていないが、ユタは依頼者が何か相談事を持って訪れてくると、父方の血縁に則った位牌継承をしていないことに災因を求めることが多かったようだ。位牌を正しく継いでいないから、先祖があゝの世で苦しい思いをしている。それが子孫に「知らせ」として伝わってきて、不幸が訪れるとする論理である。この一連の過程は「シジタダシ」（筋を正す）と呼ばれる。トートーメー問題の裏にはシジタダシを行うユタの存在があるとされ、批判される結果となった。また、「親戚が急に乗り込んできて、私の家の位牌継承が間違えていると言いついた。その親戚いわく、ユタがそう言っていたらしい。私は、その親戚に位牌と財産の両方を持っていかれた」という糾弾も頻繁に見られ、親戚同士のいざごこの引き金にもなったようである。

そして、批判の論調は勢いを帯び、ユタのハンジにはお金がかかる、ユタの言うことを実行するには色々手間がかかり生活の妨げになるなど、ユタを巡る様々な問題も明るみになった。次の記事〔琉球新報 1980年2月15日朝刊〕はそれを象徴的に示している。

母が病気になったところ親類中からウガン〔筆者注：御願と表記し、祈願、祈祷の総称〕不足といわれた。しかし、拝めば拝むほどウガン不足といわれる。最初は拝んでいたが、これまでに相当（金）を使った。屋敷も悪いから出るように言われたが、そのまま住んでいます。でも、タタリはありません。なんとかユタを取り締まる方法はないものか。〔主婦、31歳、那覇市〕

このような批判もまた、トートーメー問題では多く見られた。位牌継承へのユタの関与以外にも、ユタのハンジが民衆を苦しめる場合があるとされ、大きくクローズアップされたのだ。

以上のことをまとめれば、トートーメー問題においては、まず初めに、父系血縁に則った位牌継承を巡り、親戚同士の深いつながりの否定的な側面が露呈された。そして、親族関係を色濃く反映したユタの宗教観も批判されることになり、それに付随して、ユタへの不満が爆発したといえよう⁽⁶⁾。筆者は、この問題は沖縄社会の大きな転換点の最中に起こったと考えている。沖縄が従来保有してきた風土・文化に加え、新たに日本本土の価値観、思考様式が流入してきたと考えられるためだ⁽⁷⁾。差し当たってトートーメー問題に関係があるのは、核家族化、個人化と呼ばれるような社会組織における変容と思われる。伝統的に重んじられてきた親族間の深いつながりが、家族の幸せ、個々人の自由な生き方こそ大事だとする価値観の浸透に伴い、次第に疎んじられるようになった結果、この問題は起こったといえよう。

トートーメー問題は、沖縄社会の変化を如実に示し、本土復帰以降の沖縄について改めて考える必要性を喚起したといえよう。次節では、トートーメー問題のその後という観点から、現在、沖縄社会は如何なる様相を呈しているか概観してみよう。

3. 沖縄社会の現代的諸相

現在の沖縄に目を向けると、トートーメー問題で見られたような状況はもはや過去のものである、とは言いがたい。トートーメー問題は解決済みの事柄ではない。例えば、『琉球新報』2000年2月3日(木)朝刊の記事には、「職員の半分を女性に トートーメー、娘でも」という見出しのもと、沖縄県糸満市で行われたシンポジウムを紹介している。その主旨は、「男女共同参画社会」の実現のためにはトートーメーを女でも継げるようにし、沖縄の伝統を改めていくべきだと主張することであり、トートーメー継承の慣習の根強さを感じさせる。また、その慣習は思わぬところにも反映されている。『沖縄版——相続税の実際』[山内靖 2002]は沖縄の大きな本屋に行けばどこにでもある本だが、興味深いことに、「祭祀財産(トートーメー)と相続財産の分配をはかった現行民法は、沖縄の慣習の前では、しばしば無力となっている」[山内 2002: 93]として、わざわざ慣習法的にはどのように財産を継いだら良いかの説明が付け加えられている。また、この本ではユタについての説明もあり、トートーメー継承とユタの切っても切れない関係が述べられている[山内 2002: 93]。トートーメー継承の根強さ、ユタの影響力の高さが窺える。

しかし、現在の沖縄社会において、トートーメー問題はそれほど重大な懸案事項だともいえない。統計資料からもその一端が窺える。トートーメー問題に先立つ1977年、沖縄婦人少年室協働員会が492名を対象に実施したアンケート調査では、「家(位はい)の後継ぎについてどうお考えですか」という質問に、「長男に限る」が35.2%、「次男・三男で

もよい」が34.6%、「血縁の男子に限る」が2.0%、「娘でもよい」が20.3%、「その他」が5.1%、「不明」が2.9%であった〔琉球新報社編1980：210-211〕。長男が継ぐことを理想的と考える人が最も多く、次男、三男まで許容する考えを含めると、男系を支持する層は70%近くに上ることがわかる。

視点を変えて、最近の調査として、2006年に琉球新報社が2,014名を対象に行なったアンケートでは、「トートーメー（位牌）の継承についてどう思いますか」という質問に、「男性が継いだ方がいい」と答えた人は37.0%、「女性が継いだ方がいい」は1.0%、「女性が継いでも構わない」は10.8%、「どちらが継いでもいい」は42.7%、「分からない」は7.9%、「その他」は0.6%であった〔琉球新報社編2007：20, 71〕。男系を理想と考える人が多い反面、それにこだわらない層も同じくらい多いことが確認できる結果となっている。この二つのアンケート調査を比べると、30年近くの間、位牌継承についての考え方はだいぶ変わってきていることがわかる。

位牌継承について、現在、一般の人はどのように考えているのだろうか。『死を思い生を紡ぐ——「沖縄の死生観」論考とインタビュー』〔太田有紀2004〕は、神奈川県出身の著者が、沖縄で暮らす人々は死後の世界についてどのように考えているのか、民俗的な慣習などを如何なるイメージで捉えているのかを、7名へのインタビューから探った本である。その中で、1968年生れのMさんについての記載がある。そこでは、トートーメーについてのMさんの考えが色々と述べられており、次のように書かれている。

仏教やキリスト教では崇めているもの、象徴はひとつだよ。だけど沖縄ではそういった、強力なただひとつのものというのがない。ただ、自分がここにいるのはお父さんやお母さん、先祖のおかげだ、っていうことで祖先崇拜の信仰が強い。それで、このトートーメーっていうのが重んじられていて、それを直系の男子、長男が継ぐべきだという考え方がある。でも今の若い人にとっては、トートーメーそのものが、一年を通じてやるべきことがたくさんある「厄介なもの」っていうのが強い。だから誰が継承するかとなった時には原則的に、まず長男、だめなら次男、となっているようで、「持つべき人」がない場合、あるいは何らかの理由で行き場を失ったトートーメーがお寺などに預けられるというケースも少なくはない。〔太田2004：90-91〕

2006年のアンケートを見る限り、このような考えを持っている人は、現在の沖縄ではかなり多くなっているのではないだろうか。トートーメー継承の慣習の根強さを感じさせる一方、それにとらわれない生き方を模索する発言といえる。トートーメー問題が起こった

当時も、上記のような考えを持つ人がいたことは確かであるが、かなり一般的になってきていると言えるように思う。

2006年のアンケート調査は色々とし唆に富む内容になっている。位牌継承以外にも、「あなたがこれまで生きがいとしてきたことは何ですか⁽⁸⁾」、「あなたの隣近所との付き合いはどの程度ですか⁽⁹⁾」など、現在生きている人々の価値観に多様な角度からアプローチし、質問に対する回答が提出されている。少し参照すると、家族の幸せを望む声が多く、他方、隣近所などの付き合いは希薄になりがち側面が窺える結果となっている。

父系血縁原理は、門中を組織する上での基軸となる規範である。その規範が近年揺らいできたことは、親族関係が沖縄において、従来ほど重要なものとは認識されていないことを意味すると考えられる。家族社会学者の玉城〔1998〕は、現代の沖縄は伝統的な価値観が根強く息づく一方、核家族化や個人化が進行していると位置づける。筆者もその意見には概ね賛同する。トートメー継承の規範が揺らぐことは、がっしりとした親族関係が、以前ほど求められていないことを意味すると考えるためである。

4. ユタの宗教観の現代的変容

沖縄社会の変化は、ユタにとっては大問題である。家族や個人こそ尊重されるべきであるという考えが広まると、親族関係を中心とした宗教観をもつユタのハンジは、人々にとって受け入れがたいものになってしまうためだ。しかし、ユタは現在でも求められている。筆者は、その背景にはユタの宗教観における変容があると考え。以下で紹介するユタ三人は、トートメー問題で槍玉に上がった要素を、見事に乗り越えている。結論を先取りしていえば、これまで親族関係に向かいがちであったユタの宗教観、ハンジが、家族や個人を中心としたものになり、現代に生きる人々のニーズに巧みに適応しようとしているのである。個々の事例をじっくり見ながら、ユタの新たな展開の息吹を感じてみよう。

・Yさん（女性、那覇市在住、72歳）

Yさんについては、池上良正〔1999：470-482〕もその著書の中で述べている。そこで、池上の議論も参照しながら考えてみよう。池上によれば、Yさんは「都市のユタ的職能者」と位置付けられるとし、その特徴を、「すでに地域社会における在来の御願所・拝所の多くを喪失した都市的状況のなかで、沖縄全域を射程においた聖地の統合的体系化や歴史の再構築が試みられていること」〔池上1999：470〕に見出している⁽¹⁰⁾。沖縄の経済的中心地である那覇市や浦添市を少し歩いてみると、アパートやマンション、ショッピングモールなどが林立し、更なる開発が推し進められていることがわかる。それに伴い、古く

から人々の崇拝を集めてきた御嶽などに代表される沖縄の聖地は、その姿を消しつつある。Yさんはこれを問題視し、自己の霊的な能力を用いて、忘れ去られつつある聖地に宿る神や先祖と対話し、その場所を新たな聖地として創出する活動を積極的に行っている。

Yさんのこの職能は、依頼者への対応にも如実に表れている。Yさんは依頼者が何か悩み事を持って訪れると、しばしば彼／彼女らを御嶽・聖地に連れていく。連れていく場所は、毎回同じところというわけではなく、Yさんの多様な宗教観を活用して、その依頼者ごとに異なるところへ行く。Yさんによると、そこは依頼者の先祖にとって馴染み深く緑のある場所であるらしい。つまり、依頼者にとってはルーツともいえる場所である。そこを訪れて何をするかという、依頼者の先祖とその場所、若しくはそこに宿る神との関係を説いたり、共に線香を点すのである。言い換えれば、依頼者にとっては全く知らなかった自己の由来を認識させ、そこに宿る霊的な存在とのつながりの儀礼を行っているといえる。Yさんは、依頼者に訪れた災難・不幸の原因を、彼らが自己のルーツをしっかりと認識せず、そこにつながっていないためであると考えているのだ。Yさんの宗教観、実践は、都市化が進行し人と人との繋がりが希薄になりがちな現代人に、自己のアイデンティティを確立する契機を与えているといえるように思う。

Yさんは、一つ一つの聖地に意味付けを与え、そこを依頼者が如何にして結ばれているか具体性をもって説く。このように依頼者個々人のルーツを徹底して探す巫者は、管見の及ぶ限り、報告された事例はない。また、この一連の過程はYさんと依頼者の行動があれば事足る実践であり、親戚や家族などを伴わずとも可能な儀礼行為であることにも注目したい。何故なら、トートーメー問題で見られたように、親族の協力が必要となるハンジであれば、依頼者にとっては受け入れがたいものであると思われるためだ。

以上の記述は池上の議論を参考にしているが、筆者としては、トートーメー問題当時のユタと比較しながらYさんについて考えるためには、彼女の宗教観における柔軟性に目を向ける必要性を感じる。筆者はYさんと面談した際、位牌継承について「やはり位牌は男系で継ぐべきか」と聞いてみた。するとYさんは、当然そうすべきであるとしながらも、「私は格の高い神とも通じている。そのため、私が神にお願いすれば女の子が継いでも大丈夫ようにできる」と述べた。多様な神・先祖との交流を得意とするYさんだからこそ、依頼者の置かれた状況に大きく配慮したハンジを下すことができるのだ。

大橋英寿 [1999 : 219-298] や佐々木宏幹 [1978] の意見を参考にすれば、ユタは一般的にその成巫過程において、御嶽を巡り歩き、様々な神や先祖との接触、交流を図る。また、ユタとして成巫した後も、聖地に祈りを捧げることは継続して行うようだ。その意味において、Yさんの宗教観は、これまで示されてきた沖縄の伝統的な宗教観や実践を大き

く逸脱するものではない。重要なのは、ユタが本来備えていた職能を上手く活用しながら、柔軟性に富んだハンジを下し、個人に重きを置いた言説が見出せることである。

・Iさん（男性、那覇市在住、68歳）

Iさんは、依頼者にその家の見取り図を持参させ、それをもとにハンジを行うユタである。つまり、家相診断を専門とした巫者なのだ。W・P・リーブラ [1974: 115-119] も指摘しているように、ユタのその多岐に渡る職能の一つとして、家相診断が挙げられる。その意味において、家相診断自体は何ら珍しいものではないが、Iさんは家相以外のこと、例えば位牌継承の間違いによる先祖の祟りなどを依頼者に説くことはせず、そこがこれまで語られてきたユタとは際立って違う。いわば、家にやどる神に霊的な能力を一元化させた宗教観を持っているのである。

Iさんによれば、正しい家相とは、人間、特に女性の身体を想定したものであるという。人間が住む家は北西に水物をまとめなければならない。水物とは台所、トイレ、お風呂であり、それらは穢れているので、北西にコンパクトにまとめた家にしなければならない。女性が膝を抱えて横になり、ちょうどお尻の部分が北西に当たる姿を想定しているようだ。頭はいつも太陽の光が射す方向、つまり東か南になるのが理想だという。人間は母親から生れる。母体である家に異変があれば、その子供である住人もまたおかしくなる。逆に、家相のルールを正しく守れば、住人は健康に日々の生活を送れるのだと説く。また、その他にも、Iさんにしかわからない様々な決まりごとがあるようだ。Iさんによれば、家を正しく造っていないとそこに住む神に無礼となり、その霊的な存在は苦しい思いをすることになる。そうすると、家の住人に知らせとして苦しみが反映されてしまうのであって、Iさんのハンジを受けた依頼者は、多少費用がかかっても家を建て直すか、部分的にリフォームすることになる。

家相診断や家に住む神々、その知らせなどは先行研究でもしばしば散見された沖縄の民俗的な宗教観であり、一見すると注目に値する言説とは思われないかもしれない。しかし、Iさんは家の中に住む神にのみ人を不幸にする力があるとし、家の外側、例えば近くにある御嶽、お墓などに宿る神・先祖にはそのような力を認めていない。従来のユタならば、家に宿る神のほかにも、家の外に宿る霊的な対象への信仰も説いていたはずである。同時に、祈願をするのは家の住民のみならず、親戚や地域の人々なども深く関わっていた。リーブラの記述からはそのように読み解くことができる。対照的に、Iさんの宗教観においては家、つまり家族が重要な単位となっていることがわかり、トートメー問題で批判的に語られた親戚が介在する余地は極端に減っていることがわかる。

みてきたように、彼は家に宿る神を最も重視する。そのため、住民は、日ごろ自分が健康に生きているのは、その神のおかげであると認識すべきであり、そのような霊的な対象への祈りを欠かすべきではないという。しかし、ここで注目したいのは、祈りを捧げるのはそこに住む家族が心を込めてやるべきであって、Iさん自身がやっても意味がないと考えていることだ。つまり、Iさんは神の苦しみを感じ取る能力は持っているが、その苦しみを取り除くためには、家族の成員が主体性をもって信仰に励まなければならないとする。再びリーブラ [1974: 107-115] の意見を参考にすれば、ユタとは、特別な霊的能力を持っている宗教者と周囲からは考えられ、ときにはユタたち自身もそのように自覚し、先祖へ祈りを捧げる際も、ユタが主導的な位置を占めていたといえる。この点においてIさんの言説は際立ち、家の住民に主体性を持たせ、その宗教観においては、「家族」がかなり大きな位置を占めていることがわかる。

家のリフォームには費用がかかり、他人の力を借りなければならないこともあるかもしれない。だが、トートーメーの継承を修正するためには親戚の協力が必然的に要求されることを念頭に置いて考えたい。トートーメー問題で批判されたことは、ユタの宗教観が親族関係に大きく規定されていることであった。Iさんは、父系のことや親戚のことは持ち出さず、家相一本に絞ったハンジを下す。そこに注目すると、Iさんは、家族に主体性を持たせ、家族の問題は家族で処理することを可能にしているユタの事例であるといえる。これまで述べてきた、沖縄における核家族化との関連が十分に想起されることを確認しておきたい。

・Mさん（男性、浦添市在住、50歳）

ユタといえば、依頼者の苦難の原因を多様な災因論で説明し、それへの対処法を示す宗教者であると考えられる人は多いのではないだろうか。筆者も、当初はそのような印象を持っていた。事実、これまでみてきた二人のユタ（Yさん、Iさん）は、それぞれ異なる職能に力点を置いた宗教観を示しているが、神や先祖の崇り、知らせという論理を用いてハンジに臨む点では一致している。しかし、ここで紹介するMさんは崇りを一切認めず、依頼者が「自分が抱えている問題の原因は先祖や神の崇りか」と考えていたら、逆にそれを否定するところに特徴がある。

それでは、我々に降りかかる苦難の原因は一体どこにあるのだろうか。筆者は彼との面談のさい、父系継承についてどのように考えているか多く聞いた。その際、Mさんは、位牌はできれば男の子が継いだ方が良いが、無理なら次男、三男でも全く構わないと考えていることがわかった。次の文章は、筆者の「大切なのは位牌継承を絶やさないことです

か]という質問への、彼の応答である。

まあ、そういうことになるね。親族、子や孫たち、みんなで考えていくってことが大事。沖縄には、先祖崇拝のために、おばちゃん連中は家を売ったり、借金まみれになったりとか、そういう人が来る。私はそういう人たちには、おばさん、先祖を大事にすることもいいけど、先祖を崇拝するってことは、まずは我々が幸せにならないといけないんだよ、と言う。沖縄には、形式にこだわりすぎる人が多い。所詮、仏像や位牌なんて人が作ったものだよ。あなたが手を合わせて神に祈っていても、祈るのは、仏像にじゃない。神は、人間の、つまり内なる神に祈るんだよ [筆者注：この発言の際、Mさんは自身の心臓部分を指差していた。つまり、「内なる神」は、心臓の部分に宿っていると考えられよう]。だけど、人間というのは弱いものだから、内なる神に感謝するかな。しないでしょ。だから、朝、そして夜、正座して神棚に向かうんだよ。祈願することは、自分に祈願する事と一緒にんだよ。

この発言からも明らかなように、Mさんは、我々一人一人が自分自身を見つめ直すこと、それこそが正しく生きるために必要なのだと考えている。神や先祖は確かにいるし、我々を見守ってくれている。しかし、特別な宗教的能力を備えていない人は、そのような霊的な対象を目にすることはできない。そのため、我々は自分自身の内側に宿る「チヂガミ⁽¹¹⁾」(守護神)と向き合い、それを通して外部に宿る神に祈りを捧げ、日ごろの感謝を述べるべきである、とする。Mさん自身も、彼と依頼者のチヂガミとの交流を通して、ハンジを下している。

Mさんの宗教観は、依頼者に具体的な宗教的实践を求めない点において、その特徴は際立つ。一般的に、ユタに診てもらった後、依頼者は何らかの行動を起こさなければならない。位牌継承の間違いを指摘されたら、親戚と相談して対策を考えなければならない。位牌の修正の他にも、親族一同揃って先祖にお詫びの祈願をしなければならない場合もある。また、ユタが依頼者に説くことの一つのキーワードとなるのは「ウガンプスク」(御願不足)というのがある。これは、子孫である依頼者が先祖に対してあまり祈りを捧げてなく、拝んでも気持ちがいらないため、先祖が苦しい思いをしているという災因論である。これなども、具体的实践を求める宗教観といえよう。トートーメー問題においては、このようなユタの宗教観が、忙しい日々の生活を圧迫し、親族とのいざこざを引き起こす要因になっているとして、批判された。

ところが、Mさんとはっばら依頼者の心の持ちようの問題、内面の霊性の問題を説き、

具体的な行動は依頼者個々人が自由に決めるべきであるという考えである。具体的には、Mさんは依頼者に性格の問題をよく語る。例えば、「あなたは優しい人だけど頑固だね。あなたの親も似たようなところがあるね。だから、お互い意地を張っちゃって喧嘩しちゃうんだよ。相手のことも考えて、もう少し優しく接してあげなさい」というように、Mさんの守護神と依頼者のチヂガミとの交流から個々人の内面を読み解き、ハンジを下すことが多いようだ。内面の問題を多く語ることで、依頼者に、自分自身を見つめなおす機会を与えているといえよう。従来ユタは、個々人の内面については直接的にはあまり語らず、悩み事への対処法として、外に宿る霊的な存在への祈願などを求めているといえよう。その点、Mさんは、まずは内面についての話から入ることで、依頼者に主体性を多く持たせ、自発的な信仰心を刺激しているといえる。

とはいえ、注意しなくてはならないのは、Mさんは御嶽に宿る神、家に宿る神、男系に沿った位牌継承、祖先崇拜などを否定しているわけではないことだ。それらは拝むべき対象ではあるが、強制してはいけないと考えているのである。この事例は、これまで親族関係などに向かいがちであった沖縄の民俗宗教的世界観を、個人に力点を置いたものへ再構成する動きを感じさせる。本節で挙げた他のユタと同様に、チヂガミという用法もまた、新しいものではない。しかし、チヂガミを通して依頼者に語ることの多くが性格のこと、彼／彼女の内面のことであるというのは、これまで示されてきたユタの宗教観と比べると、かなり新しいものといえる。繰り返しを恐れずに、強調して言えば、トートーメー問題で否定されたユタの価値観とはずいぶん異なっていることがわかるのである。

5. おわりに

本稿は、沖縄社会の現代的な様相を踏まえ、ユタの宗教観における変容を探るものであった。トートーメー問題で明らかになったように、現代において、位牌を男系で継ぎ、その規範に則った親族関係を構築することはかなり困難になってきている。少子化や過疎化の問題の他にも、人々の意識において、位牌を男系で継がないと先祖が苦しい思いをすることになるという観念は、かなり薄らいできているようだ。筆者はそこに着目し、現代のユタは如何なる宗教観を持っているか個々の事例に沿って考えてきた。

現代の沖縄社会とユタについて考えるためには、日本本土との関連から探ってみる必要がある。そこでは、近年の現象として、新宗教運動の社会的インパクトが弱まり、代わってスピリチュアリティ、新霊性運動＝文化が台頭してきた。島藺進 [2007] は、その背景として、個人化という社会変動があると指摘する。独自の教義を持ちながら、教団内、若しくは家族や親族との連帯を多く説いてきた新宗教に対し、そのようなことはあまり強要

せず、個々人の靈性を重視し、自己変容を求める思考様式が好まれるようになってきたのだという。現代の沖縄社会とユタについて考える上で、この指摘を無視することはできず、そことの関連性が大いに想起されよう。

以上のことを念頭に置いて考えると、沖縄のユタの宗教観における現代の変容とは、これまで親族関係に向いがちであったユタの宗教観が、家族や個人を中心としたものになることだといえるのではないか。Yさん、Iさん、Mさんの三人は、その宗教観において、トートナー問題で批判されたユタの要素を見事に乗り越えている。御嶽、家相、チヂガミなど、そこで用いられている言説は、従来からユタの職能として紹介されてきたことであり、決して新しいものではない。しかし、注目に値するのは、彼らは、シジタダシやウガンブスクなど親族の協力を必然的に要求することを、ハンジにおいて依頼者に説かないことである。Yさん、Iさん、Mさんの宗教観は、家族の協力や、依頼者本人の実践、若しくは内面の変革を求めるものである。現代の沖縄において、親戚付き合いではなく、家族の幸せや、個々人の自己実現こそ大切であるとする観念がにじみ出ているように思われる。彼らをユタ全体の中で如何にして位置付けていくかは今後の課題となる。しかし、本稿で取り上げた三人の事例は、ユタが従来から持っていた職能を巧みに使い分け、民俗宗教の新たな展開を感じさせるものであったことは強調しておきたい。

とはいえ、既に幾度となく述べてきたが、ユタの宗教観が全面的に新しいものになったわけではなく、そこには注意を払わなければならないだろう。なぜ彼らはユタが従来から持っていた職能を活用することで、現代社会に適応しようとしているのか、その意味については論じ尽くせていない。恐らくそれは、沖縄において、いまでも祖先はとても大切にされており⁽¹²⁾、「ヒヌカン」(火の神)などへの高い関心が窺えることと無関係ではないと思われる⁽¹³⁾。つまり、民俗的な慣習や信仰が、現在も人々の間で尊重されていることに関係すると思うのだ。しかし、見てきたように、ユタといっても伝統的なユタのままではない。沖縄も変わってきている。ユタにとって、そして沖縄の人々にとって、祖先や神とは如何なる存在で、従来と比べて何か変化は見出せるのか。現代の沖縄社会とユタについて考える上で、避けては通れない問題である。そのことについて論ずるのは、別の機会に譲ることにしたい。

注

- (1) 門中と一口にいても、その形態は多様であり、地域的な偏差は大きいようだ。しかし、比嘉 [1987: 68-92] の議論を参照すると、特に戦後の沖縄においては、これまで地方ごとに異なっていた親族関係のあり方が、父系血縁原理をもとに再編成される動きが指摘できる。比嘉は、これを「門中化現象」と呼んでいる。本稿ではこの視点に立ち、「門中」とは、父系血縁原理をもとに構成される親族集団を指すことにする。
- (2) 教団の創設者は仲原正夫という沖縄出身の男性。1980年代において沖縄で最も信徒数を伸ばしたキリスト教会である。池上によれば、同教団は1980年代から1990年代までの間に、日本本土において「日本基督教団」や「日本聖公会」などの「主流派」が教勢の停滞を見せる中で、「福音系」や「純福音系」と総称されるような教会が躍進していく現象の一つに位置づけられる見通しを立てている。
- (3) 教祖は高安六郎という男性。生長の家に入信した後、脱会し、龍泉を創設。現在は「いじゅん」と改称。詳しい数字は把握できていないが、島村によれば、1980年代にかなり教勢を伸ばしたようである。「キンマンモム大神」と呼ばれる最高神を祭る。「龍泉はトートーメー問題解消駅」というキャッチフレーズを打ち出すことで、トートーメー問題で苦しんでいた人々を多く惹きつけたことは注目に値しよう。
- (4) 筆者は以前に、同様の観点に立って、現代のユタについて考えを述べたことがある [新里 2008]。本稿は、そこでの議論をより深く掘り下げ、詳細に論じようとするものである。
- (5) トートーメー問題についての記事は、琉球新報社が『トートーメー考-女が継いでなぜ悪い』 [1980] でまとめ、大きな反響があったことを述べている。少し参照すると、「予想を超える反響があり、社会部の直通電話は、連載をはじめると同時に鳴りっぱなしになった」 [琉球新報社編 1980: 1] とある。当時、この問題が、人々にとって如何に切実なものであったか理解できよう。
- (6) 言うまでもなく、筆者は、親族関係に規定されているからといって、ユタは個人を救済する術を持っていなかったと述べているわけではない。既に池上良正 [1999: 422-467] が指摘していることだが、ユタの救済観として、依頼者を神や先祖、近隣の住民、親族、家族などと結びつけ、個人を取り巻く様々な関係性の中に位置付ける機能が挙げられる。シジタダシなどは、依頼者と神や先祖、親族との「歪んだ」関係性の修正ともなりうる。それを通して、自分とは何者か、自己と他者との関係は如何なるものかしっかりと認識させることを可能にする場合もあるだろう。しかし、ユタのそのような救済観が、沖縄社会の変化に伴い、人々にとっては受け入れがたいものになってしまったことに、トートーメー問題が起こった原因が隠されていると考える。
- (7) 大橋英寿 [1998: 115-134] は、トートーメー問題をもとに、沖縄社会の構造的解明を試みている。彼によれば、当時の沖縄は、「慣習法的価値観」と「新民法的価値観」の「拮抗」状態にあったとできる。即ち、門中に代表される慣習法的価値観と、男女平等を理想とする新民法的価値観とのせめぎあいである。いうまでもなく、新民法的価値観とは、主に本土復帰に伴う社会変動によって沖縄に浸透したものであり、この指摘は、本稿の議論を裏づけているといえよう。
- (8) 「あなたがこれまで生きがいとしてきたことは何ですか」という質問に、「仕事や事業の

成功」と答えた人は10.4%、「金銭的に豊かになる」は5.4%、「家族の幸せや健康」は62.8%、「趣味」は10.9%、「ボランティア等社会に貢献すること」は2.1%、「分からない」は6.1%、「その他」は1.8%、「無回答」は0.6%となっている〔琉球新報社編2007：12、66〕

- (9) 「あなたの隣近所との付き合いはどの程度ですか」という質問に、「とても盛んだ」と答えた人は12.6%、「普通に会話する程度」は47.4%、「あいさつ程度」は35.5%、「まったくない」は4.5%であった〔琉球新報社編2007：15、68〕
- (10) 池上は彼女のことを、「巫者信仰の現代的展開」〔池上1999：468-521〕という章の中で「都市のユタ的霊能者」と位置づけている。そこでは、「聖地の統合的体系化や歴史の再構築」の他にも、「自らの教義・世界観・救済観などの体系化、とくに文字を媒介とした体系的整除化への志向性が見られること」〔池上1999：470〕もこれまでのユタには見られなかった特徴であると述べている。近年、沖縄では民俗的な語彙を話せる層が減り、在来の信仰様式もしっかりと維持されているとは言いがたい。彼女は、わかりやすい「日本語（標準語）」で依頼者と接し、祈願の方法なども体系的に示している。本稿ではこの点については触れないが、筆者が調査したユタもまた、日本語で依頼者と接し、著作を刊行するなど同様の特徴を備えている。今後掘り下げてみたい課題である。
- (11) チヂガミという概念は、ユタの宗教観を捉える上でも、非常に重要な意味を持つ。このことについて、大橋は、「ユタは“チヂガミ”とよぶ守護神をもち、それに仕える義務を宿命としている。ユタが仕えるチヂガミは自分の祖先系譜につらなる上代の祖先霊であったり、“自分だけの独自の”カミであったりすることが多い。いずれにしても共通のカミではないために、「自分のチヂガミがこうさせる」として独自性を強調することができる。チヂガミは共有の神ではないから、教義の内容についても巫儀の形態についても個人差は大きく、定型性を欠くことになるが、同時にそれによって形式にとらわれることなく、組織にしばられることなく、自由奔放に自分の個性や創造性を発揮することもできる。この点が沖縄シャーマニズムの一大特徴といえようが、このバリエーションの大きさが研究者を戸惑わせもするのである」〔大橋1998：25-26〕と述べる。このようにユタは、自己のチヂガミに従い、依頼人若しくは依頼人のチヂガミを通して判示を下すのである。
- (12) 2006年の調査では、「沖縄の伝統的な祖先崇拜についてどう思いますか」という質問に、「とても大切だ」と答えたのは50.3%、「まあ大切だ」は34.4%、「あまり大切ではない」は2.0%、「まったく大切と思わない」は2.0%、「分からない」は10.6%、「無回答」は0.7%であった〔琉球新報社編2007：19、71〕。祖先は大切だとする観念が広く共有されていることが窺える。
- (13) 沖縄の大きな本屋へ行けば、大抵どこにでも「郷土コーナー」がある。そこでは、祖先やヒヌカンの祭り方を詳しく記した本が夥しく置いてあり、高い感心が窺える。一例として挙げれば、『よくわかる御願ハンドブック——ヒヌカン・トートーメー 12ヶ月』〔『よくわかる御願ハンドブック』編集部、2006、ボーダーインク〕、『暮らしの中の御願——沖縄の癒しと折り』〔高橋恵子、2003、ボーダーインク〕、『スコーとトートーメー——ひと目でわかる！沖縄の葬式と法事と位牌 沖縄その不思議な世界』〔むぎ社、2007〕などは高い人気があるようだ。

参考文献

- 池上良正 1991 『悪霊と聖霊の舞台——沖縄の民衆キリスト教に見る救済世界』 どうぶつ社。
- 1999 『民間巫者信仰の研究——宗教学の視点から』 未来社。
- 太田有紀 2004 『死を思い 生を紡ぐ——「沖縄の死生観」論考とインタビュー』 ボーダーインク。
- 大橋英寿 1998 『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』 弘文堂。
- 桜井徳太郎 1973 『沖縄のシャーマニズム——民間巫女の生態と機能』 弘文堂。
- 佐々木宏幹 1978 「カミダーリイの諸相——ユタ的職能者のイニシエーションについて」 窪徳忠編『沖縄の外来宗教——その受容と変容』 弘文堂 pp.409-447。
- 佐藤壯広 1999 「沖縄のシャーマニズムと精神世界の交錯——ユタとセラピストの出会いから」『沖縄民俗研究』第19号 沖縄民俗学会 pp.53-74。
- 塩月亮子 1999 「沖縄シャーマニズムの現代の変容——民族的アイデンティティの宗教社会学的研究」 宮家準編『民俗宗教の地平』 春秋社 pp.221-234。
- 島菌進 2007 『精神世界のゆくえ——宗教・近代・霊性』 秋山書店。
- 島村恭則 1995 「沖縄における民俗宗教と新宗教——『龍泉』の事例から」『日本民俗学』第204号 日本民俗学会 pp.1-37。
- 新里喜宣 2008 「沖縄の社会変動とユタの宗教観の変容——トートーメー問題のその後」『国際宗教研究所ニュースレター』第60号 「国内の動向」欄 国際宗教研究所 近刊。
- 玉城隆雄 1998 「ジェンダーからみた沖縄の家族の特色とその変化」『家族の変容——ジェンダーの視点から』 沖縄国際大学国際学術セミナー実行委員会 pp.75-85。
- 比嘉政夫 1987 『女性優位と男系原理——沖縄の民俗社会構造』 凱風社。
- 山内靖 2002 『沖縄版——相続税の実際』 草輝出版。
- 琉球新報社編 1980 『トートーメー考——女が継いでなぜ悪い』 琉球新報社。
- 2007 『2006 沖縄県民意識調査報告書』 琉球新報社。
- W・P・リーブラ 1974 『沖縄の宗教と社会構造』 崎原貢、崎原正子訳、弘文堂。
原著 Lebra, William, P. 1966 *Okinawan Religion: Belief, Ritual and Social Structure*, University of Hawaii Press.